## 1．目的

　一般に、人々は自分の人生を振り返ったときに、何らかのライフヒストリーを思い描き、一貫した筋道があったように語ることが多い。当時は辛いとしか感じていなかった出来事を、美しい思い出に置き換えたり、逆にそれなりに幸福を感じていた生活を、後から、大変な苦しみであったかのように語ったりすることもある。

　そのため、ある人がある時期に、自分の人生の記憶をどのように語るかは、自分の人生の筋道をその人がどう捉えているのかを象徴している。それは歪められた記憶ではあるが、人々が自分の生きている社会の中で、自分の生き方をどう位置付けているかを知る材料にもなる。とくに、人生の岐路に立ち、将来の筋道を模索している若者が、どのようなライフヒストリーを語るのかを調べることは、意味のあることである。

　そこで、このレポートでは、「幸福感」という人生の一側面を材料にして、現代の大学生が自分の人生を振り返ったとき、幸福感の浮き沈みをどのような軌跡で表現するのかを調べる。幼少期から大学時代までの幸福感を1本の線で描いたとき、それを上昇傾向で示すのか、下降傾向で示すのか、といったパターンを分析すれば、現代の若者が現在、あるいは将来の社会をどのように想像しているのかを知る手掛かりになるだろう。

## 2．方法

|  |
| --- |
| 図1　使用した調査票 |

　調査は、2012年10月9日、関西大学の学生に対して図1のような調査票を用いておこなった。広場で昼休み中の学生などに場当たり的に調査を依頼したので、統計的な代表性は確保されていないが、大まかな傾向は知ることができるだろう。調査協力者は、男性29名、女性16名の計45名で、学年は1年生から大学院生までばらけている。確認はとっていないが、調査地が文系の学舎近くであったので、多くは文系学生と予想される。

　描いてもらった幸福度の軌跡は、以下の手続きでデータ化した。まず、1、4、7、10、13、16、19歳の3歳刻みで、各時点での幸福度の高さを測った。それぞれの高さについて、最低から最高までを10分割して1～10点の整数で得点を与えた。各年齢では、乳児期、幼児期、小学校低学年、小学校高学年、中学生、高校生、大学生のそれぞれの時期を代表している。

　次に、これらの7つの時期の幸福感を用いて、クラスター分析をおこなった。クラスター分析によって、大学生が表現した幸福感の軌跡に、どのようなパターンがあるのか分類することができるはずである。

【以下、実際におこなったクラスター分析の設定を説明すること。どのような設定（連結の基準や、クラスターの数の設定）でクラスター分析をおこなったのか、なぜそのような設定にしたのか、等】

## 3．結果

【クラスター分析の結果を図表と文章で表現すること。最低限必要なことは、どのようなクラスターが析出されたのかを示すこと。性別や学年との関係なども示せるとなおよい。ここでは客観的な結果だけを示し、なぜそうなったのかということや、この結果にどういった意味があるのか、といった解釈は示さない（そのようなことは、「考察」としてきっちり区別して示す）】

## 4．考察とまとめ

【分析結果の解釈や意味、今回の調査や分析の問題点などを考えて、文章にする。この部分は、ある程度根拠のない主観的な表現でよい。最後には、結局何をしようとして何がわかったのかを簡単にまとめ直すこと】

【もし、何か参考にした文献があるならば、書誌情報（著者・出版年・タイトル・出版社）を示す。今回は小課題なので、基本的にはそこまでする必要はない】

【別途、表紙を付けて、レポートのタイトル（自分でつける）、氏名、学籍番号、提出日、授業名などを記すこと】